

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2019年7月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第7回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ピアノ部門:2019.5.25(土)～6.9(日) ヴァイオリン部門:2019.6.15(土)～6.30(日)

第7回仙台国際音楽コンクールピアノ部門ファイナル演奏評

真嶋雄大(音楽評論家)

仙台国際音楽コンクールが、今年第7回を迎えた。今回筆者は初めて仙台国際音楽コンクール・ピアノ部門のファイナルにお伺いしたが、内外の国際コンクールに比べても、しっかりとした運営の構築、肌理細やかなホスピタリティ、そして何よりコンテストたちの演奏レベルの高さが印象に残った。

それにはコンクールの特徴でもあるコンチェルトを主体とした審査方法も関わっているのだろう。世界的コンクールにおいて、ファイナルがコンチェルトという設定は一般的だが、セミファイナルでも同様の上、ファイナルでは2曲を演奏するコンクールは他に例を見ない。さらにファイナルの課題のひとつがモーツァルト、それも演奏頻度の高いK466以降ではなく、それ以前の中期5曲が指定されているが、K450とK451はモーツァルト自身が「演奏者に汗をかかせる」と言ったように技巧的な難度が高く、またこの時期のコンチェルトはオーケストラへの書法がより複雑になっており、ピアニストにとってもオケとのコミュニケーションをより柔軟にするため、多彩なファクターを総合的に俯瞰しなければならず、よりコンテストに高い資質を求める課題となっている。とは言え、若い世代でこれだけオケとの共演を体験することは極めて有意義であり、貴重な体験になったことは想像に難くない。

さてファイナルは3日間に亘って実施された。審査結果から記すと第1位は韓国出身、25歳のチェ・ヒョンロク。モーツァルトはト長調K453、モーツァルトが好んだウィーン式アクションを彷彿とさせる美音やデ・タシェのような奏法で、いかにもモーツァルトらしい情感を築く。また長短調のコントラストや調性感が比類なく、取り分け第2楽章は端整で気品に満ちて秀逸。もう1曲はチャイコフスキーの第1番。あくまで正統的なアプローチであり、技巧的には盤石でスケール感も十分、オケとの協調性も抜群で安定しており、自らの個性と資質をきっちりアピールできたのではないかと。

第2位はアメリカの25歳、バロン・フェンウィック。モーツァルトは同じト長調K453。硬質ながら芯のしっかりしたタッチであり、方向性のはっきりとした瑞々しいモーツァルトではあるが、現代のモダン・ピアノにこそ相応しいテイストだ。もう1曲はチャイコフスキー第1番。リーチや手も大きく、それを活かした強靱なタッチが魅力的。ダイナミックな演奏で旋律もよく歌うが、全体的にやや粗さが目立ったか。

第3位はファイナリスト中、唯一の女性でロシアの28歳ダリア・パルホーメンコ、セミファイナル1日目の聴衆賞も

獲得している。モーツァルトで選択したのはト長調K453、オケとの共演経験も豊富とのことだが、当時のフォルテピアノを意識したように柔らかで自在なタッチは、モーツァルトの高潔さとエレガンスを紡ぐ。チャイコフスキー第1番では、重量感や駆動力はやや薄いものの全篇を通して安定しており、見通しやバランスも良く、丁寧な演奏には好感が持てる。

第4位は日本の26歳、佐藤元洋。モーツァルトはト長調K453。実に美しい音と色彩であり、対峙も真摯で滑舌も良く、モーツァルトの特質をしっかりと理解した演奏である。通常でもあまり演奏機会の多くないリスト第2番を選ぶなど意欲は充分、ダイナミックな表現も見事だが、やや全体の造形や構成に課題が残る。

第5位はやはり日本の21歳、平間今日志郎。モーツァルトは変ロ長調K450。個性的なピアニストであり、この若さで自分の世界を持っているように思われるだけに、常識や伝統に捉われないモーツァルトの展開が極めて興味深い。ロマン派作品はラフマニノフ第2番を選んだが、時折複雑な部分が垣間見えたものの、旋律をよく歌わせ、ドラマティックに弾き切った。

第6位は韓国の21歳、キム・ジュンヒョン。モーツァルトはヘ長調K459。ファイナルのトップだけに気負いも目立ったが、華麗で優雅、古典的な調性感が絶妙で輝かしいモーツァルトだ。チャイコフスキー第1番ではその疾走感が魅力であったが、ややテンポが速すぎて作品の魅力を十全に創出できなかったことは残念。ちなみにファイナリストの使用ピアノは、佐藤元洋がカワイの他は、すべてスタインウェイであった。

いずれにしても入賞者の今後の活躍を心から期待すると同時に、今後のコンクールの一層の充実、発展を強く願う。



第7回仙台国際音楽コンクールピアノ部門ファイナル演奏評

道下京子(音楽評論家)



第7回仙台国際音楽コンクールピアノ部門の予備審査には331人の申し込みがあり、通過したのは43人。実際に予選の舞台を踏んだのは37人であった。

筆者が聴いたのは、3日間にわたるファイナルとガラコンサートである。

今回も、韓国出身のピアニストが優勝をさらった。チェ・ヒョンロクは、現在ザルツブルク・モーツァルトウム大学

に在籍する25歳。モーツァルトのピアノ協奏曲の演奏については、出場者のなかで彼が最も秀逸であった。彼が選曲したのは第17番。第1楽章はやや硬さを感じたものの、第2楽章以降はタッチがしなやかであった。表現の難しいこの作品において、翳りを帯びた重みのある音を通してその陰影を深く刻み込む。音楽の隅々まで掘り起こし、しっかりと自身の音楽を奏でていた。ガラコンサートでも弾いたチャイコフスキー《ピアノ協奏曲 第1番》も渋みのある音で、多様な響きを駆使してスケールの大きな音楽を創り上げていた。

第2位はアメリカ出身のバロン・フェンウィク。マネス音楽院でフェルツマンに師事した25歳。音の発し方や音楽の呼吸がとても自然で、モーツァルトの第17番ではクリアな響きも相まって、作品をすっきりとまとめ上げていた。チャイコフスキーの第1番では、威圧するような強音ではないものの、音の空間を広く創り出し、壮大さとともにこの作品の持つ深い叙情性を繊細に表現。濃厚なリリシズムよりも、柔和な表情やチャイコフスキーらしい優美さが際立った演奏だと思う。

ガラコンサートでは、フェンウィクも第3位になったダリア・パルホーメンコもセミファイナルで演奏したベートーヴェンのコンチェルトを取り上げたが、むしろベートーヴェンの演奏の方がよかったように思う。

唯一の女性の入賞者となったパルホーメンコは、ロシア出身の28歳。ヴィルサラーゼのもとで学ぶピアニストだ。彼女もモーツァルトは第17番を取り上げた。デュナーミクの幅はそれほど広くはないものの、聴く者を惹きつけるような音の響きを生み出す。全体を通して、

一貫した流れのなかで朗らかで素直な音楽を創り上げていた。チャイコフスキーの第1番では音の質感をがらりと変え、豊かな音量で重く、粘り気のある響きが心に残る。歌心に富んだチャイコフスキーであったが、粗さが見られた点は惜しまれる。

日本人最高位は、佐藤元洋で第4位。ファイナル6名中、唯一カワイの楽器を使用した。現在はベルリン芸術大学大学院に学ぶ26歳で、シュナーベル・コンクール第3位などの経歴をもつ。彼もまたモーツァルトの第17番に挑む。奇を衒わない表現で、丁寧な演奏。柔らかく瑞々しいモーツァルトだった。リスト《ピアノ協奏曲 第2番》は、やや硬さも否めなかったものの、手堅く丹念に音楽を紡ぎ出す。他の作品も聴いてみたいと思った。

第5位は、アメリカのバーク大学に在籍する21歳の平間今日志郎。モーツァルトの第15番では、芯のしっかりとしたまろやかな音の愛らしいモーツァルトであったが、音の整理がもう少しなされてもよいと感じた。ラフマニノフ《ピアノ協奏曲 第2番》も弱音における表現の多様さなど課題も残った。ただし、自身の解釈をはっきりと示すことのできるピアニストであり、今後の成長が楽しみでもある。

第6位はキム・ジュンヒョン。ソウル出身の21歳で、現在ミュンヘン音楽演劇大学でシーララに師事。モーツァルトの第19番では、柔らかくふわりとした響きが印象的であったが、タッチや音楽表出に変化が乏しかった。チャイコフスキーの第1番でも、もっと変化に富んだ表現が欲しいところ。

コンクール終了後の記者会見の際、3つのコンチェルトを弾くことを目的に応募してきたという出場者が多く、そのことは仙台的このコンクールが国際的にも認知されている証といえよう。

セミファイナルとファイナルのなかで3曲の様式の違うコンチェルトを演奏するのは、他のコンクールではなかなか経験できることではなく、同時に非常に困難な課題ともいえる。6人のファイナル出場者は演奏技巧的に卓越していた。ただし、いたずらに自己主張に陥ることなく作品とのスタンスを保ち、曲の構造に対する深い理解に裏付けられた、作曲家の内面にまで肉薄する演奏も求められている。今回のファイナルでは、とくに上位入賞者にそのような演奏が顕著に見られ、頼もしさを覚えた。

第7回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門入賞者

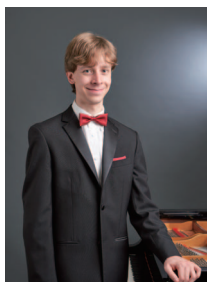
第1位

チェ・ヒョンロク



第2位

バロン・フェンウィク



第3位

ダリア・パルホーメンコ



第4位

佐藤 元洋



第5位

平間 今日志郎



第6位

キム・ジュンヒョン



■お問い合わせ先／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel: 022-727-1872 Fax: 022-727-1873 E-mail: info@simc.jp URL: https://simc.jp